

6次産業化とセルフ・エフィカシー理論からみた 若者の就農モチベーション研究

——6次産業化事業の人材育成研究——¹⁾

楠 奥 繁 則

要旨

近年、わが国の農業就業人口の減少と高齢化が問題視されている。この問題の解決策として、(農家子弟・非農家子弟の)若者を就農に導くという方法が考えられる。そして、若者を就農に導く鍵として、農業の「6次産業化」(以下、6次化)が注目されている。そこで、本稿では6次化が若者を就農に導き、この農業問題を解決する鍵となりうるのかについて、モチベーションの期待=価値理論に位置づけられるセルフ・エフィカシー理論の観点から議論する。そのことを議論するために、本研究では仮説「若者の6次化事業遂行に対するセルフ・エフィカシーが高まると、彼・彼女らの就農モチベーションが高まる」について検討した。ビデオ学習に着目し(観察学習)、大学生を対象としたパネル調査の結果、仮説は支持された。以上より、セルフ・エフィカシー理論の観点からみると、6次化は若者の就農モチベーションを高めるのに有効であると考えられるため、6次化は農業就業人口の減少・高齢化問題の鍵となりうることが示された。

キーワード：就農モチベーション、若者、農業の6次産業化、セルフ・エフィカシー、観察学習

目次

- 第1節 問題と目的
- 第2節 方法
- 第3節 結果
- 第4節 考察

第1節 問題と目的

第1項 わが国の農業就業者の減少・高齢化と農業の6次産業化

今日、わが国の農業就業人口の減少と高齢化が問題となっている。農林水産省(2016)によると、335万3千人(平均年齢63.2歳)であった2005年の農業就業人口が、2015年では209万7千人(平均年齢66.4歳)へと減少した。この問題を放置すれば、農業就業人口はさらに減少し、高齢化も加速していくことが予期される。

この農業問題は、その土地の農産物といった地域資源を活用する地域企業(本社を特定の地域に置き、主としてその地域の多様な資源を活用し、その地域独自のニーズを持つ製品やサービスを提供するなど、地域に立地する優位性を活かしている企業;金井,2016)のゴーイング・コンサーンにも負の影響を及ぼすことになるだろう。例えば、三重県志摩市には志州隼人有限責任事業組合が開発した地域ブランド『志州隼人』(芋焼酎)がある。これは「きんこ」と呼ばれる隼人芋で作った干し芋を原料としており(図1)、2013年に行われた伊勢神宮式年遷宮奉納品にも選ばれた。しかし、志摩市では年々隼人芋生産者の減少と高齢化問題に直面している(松原・楠奥,2016a)。この問題が解決されなければ、『志州隼人』を主軸に経営活動を行う地域企業の存続も危うくなる。



図1 隼人芋ときんこ (写真)

(出所) 筆者撮影.

先行研究(藤崎、2005; 藤田、1997; 小杉、2015)に基づく、この農業問題の解決策の1つとして、「農家子弟・非農家子弟の若者²⁾」(以下、若者)の就農モチベーションを高め、若者に就農してもらうという方法が考えられる。そして、就農モチベーションを高めるには、それらの先行研究によると、農業での収入が確保できる経営の確立といった、農業の先行きの見通し(期待)を若者に与えることだと考えられている。

農業での収入確保の鍵として、小杉(2015)と松原(2016)は農業の「6次産業化」(以下、6次化)を挙げている。6次化は、ベティ・クラーク法則³⁾(Clark, 1940)が背景にあり、1992年に今村奈良臣によって提唱された概念である(今村、2015)⁴⁾。第1次産業(農林水産業)従事者の所得増加と、農山村などでの就業場の増加を目的に、第1次産業が主体となって、第2次産業(加工)と、第3次産業(流通・販売)が、「1×2×3」で連携を強化することを意味する(今村、2015; 松原、2016)。つまり、農業の6次化とは、農業者、あるいは、農業者のために誰かが加工や流通・販売等を一体的に展開していくことである(室屋、2014; 松原、2016)⁵⁾。

第1次産業従事者の所得増加と、農山村などでの就業場の増加が6次化の目的であるため、「1×2」(例えば、りんご農家がりんごの生産と、りんごジュースへの加工までを手掛ける)と、「1×3」(例えば、りんご農家がりんごを生産し、加工せず、そのりんごを道の駅などで直販する)も6次化となる(松原、2016)。しかし、一般的に6次化は「1×2×3」と認識されている(室屋、2014)。したがって、本研究では農業の6次化を「農業者が中心となって加工と流通・販売を一体的に展開していくこと」(1×2×3)に焦点を当てる。

農業者は生産した農作物を、加工の段階、流通・販売の段階で付加価値を高めることができるならば、農業者は所得向上を期待できる。6次化はその可能性を示している(清原、2016; 松原、2016)。したがって、6次化は、農林水産省の重要な政策の1つとしても位置付けられている⁶⁾。

前述したように、若者の就農モチベーションを高めるには、農業での収入が確保できる経営の確立といった、農業の先行きの期待を若者に与えることが重要となる。また、6次化は農業所得向上の鍵となっている。これらを踏まえると、「若者に対し、農業の6次化事業を遂行することによって収入を確保できる期待を高めることができれば、若者の就農モチベーションを高めることができる」と考えられる。

次項では、若者の就農モチベーションを高めるために、その期待を高めることが有効なのか、そのことについてモチベーション理論の1つ期待=価値理論(例えば、Bandura、1977; Vroom、1964)の立場から議論する。

第2項 セルフ・エフィカシー理論からみた6次産業化と就農モチベーション

モチベーション理論の1つに期待=価値理論がある。期待=価値理論では、私たちのモチベーションは「期待」(予期)によって調整されると考える(Bandura、1995)。経営組織や人的資源管理、経営管理などで組織メンバーのモチベーションについて議論する際、次の2つのアプローチがある(伊藤、2017; 金井、1999; 田尾、1993)。何が人の行動を生起させるのかに焦点を当てた「内容理論」(例えば、Alderfer、1969; Herzberg、Mausner & Snyderman、1959; Maslow、1954)と、人の行動・動機づけが生起するプロセスに焦点を当てた「過程理論」(例えば、Adams、1965; Locke & Latham、1990; Vroom、1964)である。本研究で焦点を当てる期待=価値理論は、



後者の過程理論に位置づけられる。

この期待＝価値理論の1つに、Bandura (1977) のセルフ・エフィカシー理論がある。セルフ・エフィカシー理論では期待を、図2で示すように、①結果期待（予期）と、②効力期待（予期）とに区分して議論する。

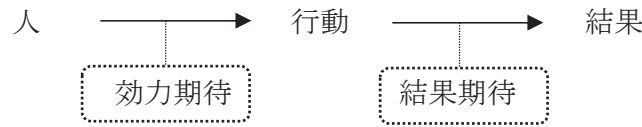


図2 効力期待と結果期待
(出所) Bandura (1977)、p.193

結果期待とは、自身のある行動によって得られるものに対する期待（予期）のことで（Bandura、1978）、例えば、「私とその職務を遂行すると、魅力的な報酬が得られるだろう」という期待のことである。先述の「農業の6次化事業を遂行することによって収入を確保できる期待」は、セルフ・エフィカシー理論では、6次化事業遂行に対する結果期待と表現される。

一方、効力期待とは、ある結果を生み出すために必要な不馴れな行動を自分はどのくらいできそうかという期待（予期）のことである（小久保、1998）。つまり、効力期待とは「不馴れな行動だが、私はやればできそうだ」という自信の程度を表す概念である。例えば、「私はその職務を遂行できるだろう」という自信のことである。セルフ・エフィカシー理論では、この効力期待のことをセルフ・エフィカシーという。なお、セルフ・エフィカシーの対象となる行動は、定義からも分かるように、不馴れな行動である。馴化された行動、すなわち、日常的な行動のモチベーションについては、この理論の研究対象とはならない。

セルフ・エフィカシーは4つの情報源「遂行行動の達成」「言語的説得」「情動的喚起」「観察学習」によって高まったり、低まったりする（Bandura、1977、1995）。

まず、遂行行動の達成だが、これは「私はやればできるだろう」と感じられる成功体験を直接獲得することを意味する。不馴れな行動の成功体験は私たちに「私はやればできる」という確証を与えてくれる。

言語的説得は、他者から「君はやればできるだろう」などと言語的に説得を受け、自己の能力に対して肯定的になり、「私はやればできるだろう」と感じられるようになることである。また、自分自身に「私はやればできる」と言い聞かせることによって（自己暗示）、自己の能力に対して肯定的になり、「私はやればできるだろう」と感じられるようになることも、言語的説得である。

自分自身の体調や気分の良い、悪いもセルフ・エフィカシーの高低に影響を及ぼす。このことを情動的喚起（physiological and emotional states）と言う。例えば、普段の練習では落ちついて行動できたが、試験や本番を迎えると、突然、緊張してしまい「私はうまくできないのではないかと、思い始めたという経験をしたことが私たちにはあるだろう。人はそのような緊張をすると不安や恐怖などを感じはじめ、そして、遂行能力が低下している時の弱さのサインとみなし、結果、セルフ・エフィカシーが低下してしまう。そのような状態の時、「私はやればできるだろう」と感じられるようになるには、その不安や恐怖の原因を取り除き、リラックスできるかが重要となる（神藤、2017）。

そして、観察学習（代理的経験）だが、これは他人が成功する様子を観察し、視覚的に学び、「私もやればできるだろう」と感じることを意味する。児童を対象とした Schunk (1987) の研究によると、課題を困難なく解決していくモデルよりも、困難を乗り越えながら課題を解決していくモデルを観察する方が、観察者のセルフ・エフィカシーを高めるのに有効であるという。

セルフ・エフィカシー理論では、セルフ・エフィカシーと結果期待の2つがモチベーションの鍵となるが、特に、セルフ・エフィカシーが重要となる。例えば、「私とその職務を遂行すると、魅力的な報酬が得られるだろう」と結果期待がいくら高くても、「私はその職務を遂行できそうにない」とセルフ・エフィカシーが低ければ人は職務を遂行しないと考える。この例の場合、その結果期待を高めるよりも、職務遂行に対するセルフ・エフィカシーを高める

方が、職務遂行というその行動を生起できると考える。つまり、行動を生起するには、「私はやればできるだろう」と感じられるかどうか重要となる。

前述の6次化事業遂行に対する結果期待（若者に対し、農業の6次化事業を遂行することによって収入を確保できる期待）について、たしかに、セルフ・エフィカシー理論でも若者の就農モチベーションを高めるには、この結果期待を高めることは重要となる。だが、先述したように、セルフ・エフィカシー理論に従うと、若者のその結果期待をいくら高めても、「私は6次化事業を遂行できないだろう」と、6次化事業遂行に対するセルフ・エフィカシー（以下、6次化セルフ・エフィカシー）が低ければ、若者は「就農」という行動をするとは考えられない。したがって、若者の就農という行動の生起を目的に、若者の就農モチベーションについて議論するならば、若者の6次化セルフ・エフィカシーの観点からも若者の就農モチベーションを高める方法を考えなければならない。

第3項 本研究の目的

本研究の目的は、セルフ・エフィカシーの観点からも、若者の就農モチベーションを高めることができるのかについて議論することである。そこで、本稿では仮説「若者の6次化事業遂行セルフ・エフィカシーが高まると、彼・彼女らの就農モチベーションが高まるだろう」を確かめる。6次化は1992年に提唱された概念である。にもかかわらず、わが国の農業問題は解決するどころか、農業就業者は年々減少傾向にある。その高齢化も加速している。これらのことを踏まえると、6次化はわが国の農業者の減少・高齢化問題の解決の鍵となると言ってもよいのか、この疑問は残る。本研究の範囲ではないが、その疑問について議論するためにも、セルフ・エフィカシー理論の観点から若者の就農について議論する必要がある。したがって、同理論の観点から就農モチベーションについて検討することは意義があるだろう。

第2節 方法

第1項 研究1

(1) 方法

Gulanick (1991) や Allen (1996) の研究を参考にすると、4つの情報源の1つ観察学習に基づいた「ビデオ学習」を用いることによって、若者の6次化セルフ・エフィカシーを高めることができると考えられる。具体的に述べると、ビデオを通じて、若者に6次化事業遂行の担い手として成功している姿を観察してもらおう。そして、ビデオを観た若者が「私にもできそうだ」と感じる事ができれば（観察学習）、理論上、6次化セルフ・エフィカシーが高まる。結果、彼・彼女らの就農モチベーションが高まると考えられる。

以上を踏まえ、仮説「若者の6次化事業遂行セルフ・エフィカシーが高まると、彼・彼女らの就農モチベーションが高まるだろう」を確かめるために、2019年4月に愛知県内にある私立N大学で開講された講義a（履修者96名：3年生=83名、4年生以上=13名）と講義b（履修者68名：1年生=30名、2年生=19名、3年生=14名、4年生=5名）を受講した大学生を調査対象とし、ビデオ学習を用いた実験を行った。大学生を調査対象とした理由は、一般的にわが国の大学生は18歳頃（1年生）～22歳頃（4年生）である。したがって、彼・彼女らは本稿で定義する若者（15～34歳）ということができるからである。

講義aでは、6次化事業で持続的利益の獲得を目指す大西千晶氏と、小川絃未氏のビデオを観てもらい、両者が困難を乗り越えながら6次化事業で成功する様子を学生に観察してもらい、視覚的に学んでもらった。観てもらったビデオは次の3つ、大西氏に焦点が当てられた①『グッドマザーズ』（BSジャパンで2016年2月放送：13分38秒）と、②『キャスト「浦川泰幸の現場検証」』（朝日放送で2016年1月放送：9分31秒）、そして、小川氏に焦点が当てられた③『今一番知りたい！生産から小売りまでの一気通貫 農業小町が「樹上完熟トマト」で挑む』（輝く農新聞と8bitNewsが作成したビデオで2015年3月30日配信：<https://www.youtube.com/watch?v=10uzt98UfXw>；17分3秒）であった。

ビデオ内容だが、①と②は、20歳の時に就農した大西氏が困難を乗り越えながら農薬不使用野菜を生産・販売し、



また、大西氏がその農作物を加工した商品、コールドプレスジュース『FARMACY JUICE』（図3）を開発するという内容である⁷⁾。



図3 コールドプレスジュース『FARMACY JUICE』（写真）
（出所）筆者撮影。

③は、元システムエンジニアの夫婦が就農してミニトマトを生産し、そして、妻の絃未氏が加工した商品『ドライミニトマト』（東日本大震災の被災者への非常食）などを開発し、絃未氏が販売活動も行うという内容である。

具体的な方法だが、実験群とした講義aでは、まず、第1講に、筆者による講義「わが国の農業問題（農業者の減少・高齢化問題）と6次産業化」を実施した（50分）。次に、質問紙調査を実施し（事前調査）、後述する方法で就農モチベーションと6次化セルフ・エフィカシーを測定した。また、「あなたの親の職業は農業従事者（兼業農家も含む）である」という質問もし、「はい」「いいえ」で回答してもらった。それから、前述の①と②のビデオを観てもらった。そして、翌週の第2講の最初に、③のビデオを観てもらい、その直後に質問紙調査を実施し（事後調査）、再度、就農モチベーションと6次化セルフ・エフィカシーを測定した。

一方、統制群とした講義bでは、第1講（事前調査）と第2講（事後調査）で質問紙調査だけを実施し、講義bの受講学生の就農モチベーションと6次化セルフ・エフィカシーを測定した。

（2）測定した変数

就農モチベーションと、6次化セルフ・エフィカシーについては次のようにして測定した。

就農モチベーションの測定には、株式会社いろいろの「新規就農 適正・知識チェックシート」⁸⁾の「新規就農についての意欲、動機、知識」（6項目）のうち、意欲に該当する2項目「農業所得で生活し、職業としての農業を目指している」「新規就農した経営者に会ったり、体験談を直接聞いたことがある」を基にし、次の2項目「大学卒業後、農業所得で生活し、職業としての農業を目指したいと思う」「新規就農した経営者に会ったり、体験談を直接聞いてみたいと思う」を作成した（表1）。1「全くそう思わない」～4「とてもそう思う」の4件法で回答を求め、得点を与えた（range = 2～8）。得点が高いほど、就農モチベーションが高い。

6次化セルフ・エフィカシーを測定するために、表2で示すように6項目を作成した。まず、本研究では農業の6次化を、農業者が中心となって加工と流通・販売を一体的に展開していくこと（「1×2×3」）に焦点を当てており、また、大学生を研究対象としたため、「もし、大学卒業後、農家というキャリアを歩んだ場合、農業で生活していくこと」「野菜などの農作物を加工して、新しい商品を開発すること」「もし、自分で農作物を使った新しい商品を開発した場合、それを販売して利益を得ること」の3項目を作成した。

そして、松原・楠奥（2016b）は農業者が6次化事業遂行に必要な行動として、1次産業、2次産業、3次産業の知識を得ることが必要であるという。そこで、「農業の知識や情報を学ぶこと」「農作物を使った新しい商品開発のために必要な知識や情報を、加工業者などの方々から得ること」「もし、自分で農作物を使った新しい商品を開発した場合、それを販売するために必要な知識や情報を、流通業者などの方々から得ること」の3項目も作成した。

1点「全く自信がない場合」～4点「非常に自信がある場合」の4件法で回答を求め、合計点を6次化セルフ・エフィカシー得点とした ($range = 6 \sim 24$)。得点が高いほど6次化セルフ・エフィカシーが高い。

表1 就農モチベーションの項目

1. 大学卒業後、農業所得で生活し、職業としての農業を目指したいと思う
2. 新規就農した経営者に会ったり、体験談を直接聞いてみたいと思う

(出所) 株式会社いろどりの「新規就農 適正・知識チェックシート」を基に、筆者により作成。

表2 6次化事業遂行セルフ・エフィカシーの項目

1. もし、大学卒業後、農家というキャリアを歩んだ場合、農業で生活していくこと
2. 農業の知識を学ぶこと
3. 野菜などの農産物を加工して、新しい商品を開発すること
4. 農産物を使った新しい商品開発のために必要な知識や情報を、加工業者などの方々から得ること
5. もし、自分で農産物を使った新しい商品を開発した場合、それを販売して利益を得ること
6. もし、自分で農産物を使った新しい商品を開発した場合、それを販売するために必要な知識や情報を、流通業者などの方々から得ること

(出所) 筆者により作成。

第2項 研究2

(1) 方法

表2の6次化セルフ・エフィカシー尺度の妥当性を確認するために、2020年10月に、青森県内にある私立A大学で2020年度後期 Semester に開講された講義c (履修者104名; 2年生=94名、3年生=5名、4年生=5名)の受講生を対象にした質問紙調査を行った。

(2) 測定した変数

測定した変数は、6次化セルフ・エフィカシー (表2) と、一般性セルフ・エフィカシー、農業への興味・関心の3つである。

一般性セルフ・エフィカシーは、坂野・東條 (1986) の GSES (Generality Self-Efficacy Scale) を用いて測定した。この尺度は特定の状況や行動についてのセルフ・エフィカシーではなく、個人が一般的にセルフ・エフィカシーをどの程度認知する傾向があるかという、一般的なセルフ・エフィカシーの強さを測定するために作成されたものである (小久保, 1998)。この尺度は「ひっこみじあんなほうだと思う」「仕事を終えた後、失敗したと感ずることのほうが多い」「友人より優れた能力がある」などの16項目から成る。「Yes」1点、「No」0点の2件法で回答を求め (逆転項目に関しては「Yes」0点、「No」1点)、16項目の総計を一般性セルフ・エフィカシー得点とする ($range = 0 \sim 16$)。得点が高いほど、一般性セルフ・エフィカシーが高い。6次化セルフ・エフィカシーはセルフ・エフィカシー理論に基づいている。したがって、表2の尺度が6次化セルフ・エフィカシーを測定できているならば、一般性セルフ・エフィカシーと正の相関が見られると考えられる。

農業への興味・関心については、居崎・谷・小島・ほしの (2014) が開発した農業に対するイメージ尺度を用いて測定した。このイメージ尺度は、学生の農業体験の効果を検証するために開発されたもので、「農業への興味・関心」「農村への興味・関心」「農業への理解・共感」の3因子構造である。農業への興味・関心は「植物栽培を自分でやってみてみたいと思う」「農業には興味がある」「米・野菜など植物の栽培は面白い、楽しい」などの12項目から成る。1点「全くそう思わない」から6点「非常にそう思う」の6件法で回答を求め、その総計を農業への興味・関心得点とした ($range = 12 \sim 72$)。得点が高いほど、農業への興味・関心が高いことを意味する。セルフ・エフィカシー理論が背景にある社会認知的進路理論 (Lent, Brown, & Hackett, 1994) に基づいた安達 (2003) の研究によると、職業に関するセルフ・エフィカシーが高まると、その職業に対する興味が高まる。この安達の研究に従うと、表2の尺度が6次化セルフ・エフィカシーを測定できているならば、農業への興味・関心との間に正の相関が見られることが予



期される。

参考程度に、農村への興味・関心と、農業への理解・共感についても測定した。前者は「田舎・農村における人とのかわりは魅力的である」「田舎・農村に住みたいと思う」「田舎・農村は開放的で地域に入りこみやすいと思う」などの6項目から成り（ $range = 6 \sim 36$ ）、後者は「農作業は大変だと思う」「農家は大変だと思う」「農村が存続していくことは大切だと思う」などの6項目から成る（ $range = 6 \sim 36$ ）。

その他に、「あなたの親の職業は農業従事者（兼業農家も含む）である」という質問をし、「はい」「いいえ」で回答してもらった。また、参考程度に「あなたは『農業』に対し、汚い・きつい・危険などネガティブなものをイメージする」についても質問し、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

第3節 結果

第1項 結果1

まず、N大学で実施したパネル調査（研究1）の結果を示す。なお、「あなたの親の職業は農業従事者（兼業農家も含む）である」に対し、「はい」と回答した者は0名、「いいえ」と回答した者は84名であった。実験群の学生全員が非農家子弟の若者であった。

(1) 項目候補の決定

1) I-T 相関分析

参加者の平均年齢は19.71歳（実験群 = 53、統制群 = 31、標準偏差 = 1.19）であった。なお、平均年齢については、講義aと講義bの事前・事後調査の2回分のデータ（ $n = 168$ ）を基に算出した。

次に、就農モチベーションの2項目の全体得点（Total）と、各単一項目（Item）との相関係数を求め、 $r = 0.40$ を基準に項目候補を決定した。全項目 $r = 0.40$ を上回った（ $r = 0.83, 0.87$ ； $n = 168$ ）。

6次化セルフ・エフィカシーの6項目についてもI-T相関分析を実施した。結果、全項目 $r = 0.40$ を上回った（ $r = 0.74 \sim 0.91$ ； $n = 168$ ）。

2) 因子分析

6次化セルフ・エフィカシーの6項目については因子分析（最尤法、プロマックス回転； $n = 168$ ）を行った。固有値1以上を基準にしたところ、2因子以上は抽出されなかった（第1因子の固有値 = 3.57）。初期解の因子負荷量は0.48～0.79であった。

6次化セルフ・エフィカシーのCronbachの α 係数は0.90であった（ $n = 168$ ）。十分な内的整合性を有すると考えられる。以上より、6項目の合計得点を6次化セルフ・エフィカシー得点とする。

なお、就農モチベーションのCronbachの α 係数は0.65であった。項目数が2項目と少なかったために、 α 係数が低かったと考えられる。以上より、2項目の合計得点を就農モチベーション得点とする。

(2) ビデオ学習の効果

表3に、実験群と統制群の6次化セルフ・エフィカシー得点と就農モチベーション得点の平均値と標準偏差を示す。

表3 6次化セルフ・エフィカシー得点と就農モチベーションの平均値と標準偏差

		事前		事後		range
		実験群	統制群	実験群	統制群	
就農モチベーション	平均値	3.71	4.19	4.43	4.23	2～8
	標準偏差	1.21	1.35	1.20	1.48	
6次化事業遂行 セルフ・エフィカシー	平均値	12.28	12.58	13.74	12.94	6～24
	標準偏差	4.20	4.27	3.39	4.23	

就農モチベーションと6次化セルフ・エフィカシーとの相関係数は、 $r = 0.56$ ($n = 168$)であった。

ビデオ学習が就農モチベーションに及ぼす影響について確かめるために、就農モチベーション得点（事前、事後）を被験者内要因、実験群と統制群を被験者間要因とする 2×2 の2要因混合計画の分散分析（以下、分散分析）を行った。分散分析の結果（表4）、交互作用は有意であった ($F(1, 82) = 5.96$, $p < 0.05$, 偏 $\eta^2 = 0.07$)。前後の主効果も有意であった ($F(1, 82) = 8.55$, $p < 0.01$, 偏 $\eta^2 = 0.09$)。

表4 分散分析結果（就農モチベーション）

	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	偏 η^2
被験者間要因				
群：A	1.00	0.88	0.34	0.004
誤差：S (A)	82.00	2.63		
被験者内要因				
前後：B	1.00	5.97	8.55**	0.09
交互作用：A × B	1.00	4.16	5.96*	0.07
誤差：B × S (A)	82.00	0.70		

注) ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。

まず、被験者間の単純主効果は、事前調査、事後調査の群間の平均値の差の多重比較検定の結果（Bonferroni法）、①事前調査：実験群と統制群の平均値に有意差なし ($p = 0.10$)、②事後調査：実験群と統制群の平均値に有意差なし ($p = 0.56$)、であった。事前調査における群の単純主効果は、 $F(1, 82) = 2.77$, *n.s.*、偏 $\eta^2 = 0.03$ 、であった。事後調査における群の単純主効果は、 $F(1, 82) = 0.35$, *n.s.*、偏 $\eta^2 = 0.004$ 、であった。

そして、被験者内の単純主効果は、各群における事前調査・事後調査の平均値の多重比較検定の結果（Bonferroni法）、①実験群における事前調査・事後調査の平均値に有意差あり ($p < 0.001$)、②統制群における事前調査・事後調査の平均値に有意差なし ($p = 0.76$)、であった。実験群における事前調査・事後調査の単純主効果は、 $F(1, 82) = 19.49$, $p < 0.001$ 、偏 $\eta^2 = 0.19$ 、統制群における事前調査・事後調査の単純主効果は、 $F(1, 82) = 0.09$, *n.s.*、偏 $\eta^2 = 0.001$ 、であった。

図4に、就農モチベーション得点の変化を示す。

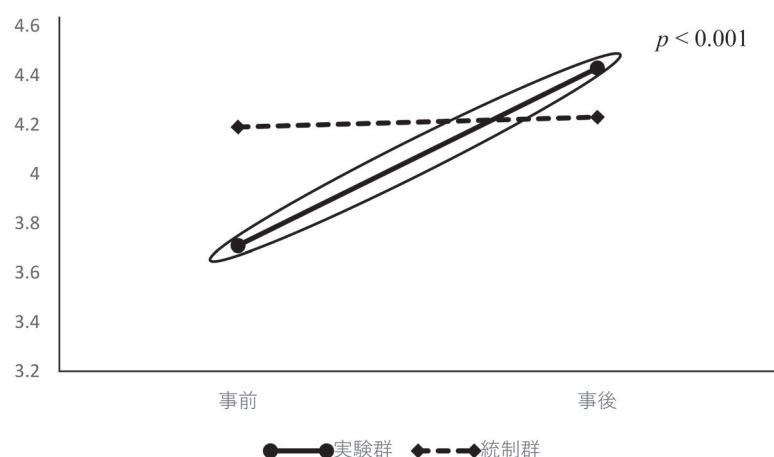


図4 実験群と統制群の就農モチベーションの変化（多重比較；Bonferroni法）



就農モチベーションが高まった理由は、6次化セルフ・エフィカシーが高まったことによるものなのかについて検討するために、6次化セルフ・エフィカシー得点（事前、事後）を被験者内要因、実験群と統制群を被験者間要因とする分散分析を行った。分散分析の結果（表5）、交互作用は有意であった（ $F(1, 82) = 4.35, p < 0.05, \text{偏}\eta^2 = 0.05$ ）。前後の主効果も有意であった（ $F(1, 82) = 6.2, p < 0.05, \text{偏}\eta^2 = 0.07$ ）。

表5 分散分析結果（6次化事業遂行セルフ・エフィカシー）

	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	偏 η^2
被験者間要因				
群：A	1.00	5.19	0.19	0.002
誤差：S (A)	82.00	27.86		
被験者内要因				
前後：B	1.00	24.47	6.21*	0.07
交互作用：A × B	1.00	17.14	4.35*	0.05
誤差：B × S (A)	82.00	3.94		

注) * $p < 0.05$

交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。

まず、被験者間の単純主効果は、事前調査、事後調査の群間の平均値の差の多重比較検定の結果（Bonferroni法）、①事前調査：実験群と統制群の平均値に有意差なし（ $p = 0.76$ ）、②事後調査：実験群と統制群の平均値に有意差なし（ $p = 0.23$ ）、であった。事前調査における群の単純主効果は、 $F(1, 82) = 0.10, n.s., \text{偏}\eta^2 = 0.001$ 、であった。事後調査における群の単純主効果は、 $F(1, 82) = 1.48, n.s., \text{偏}\eta^2 = 0.02$ 、であった。

そして、被験者内の単純主効果は、各群における事前調査・事後調査の平均値の多重比較検定の結果（Bonferroni法）、①実験群における事前調査・事後調査の平均値に有意差あり（ $p < 0.001$ ）、②統制群における事前調査・事後調査の平均値に有意差なし（ $p = 0.80$ ）、であった。実験群における事前調査・事後調査の単純主効果は、 $F(1, 82) = 14.20, p < 0.001, \text{偏}\eta^2 = 0.15$ 、統制群における事前調査・事後調査の単純主効果は、 $F(1, 82) = 0.07, n.s., \text{偏}\eta^2 = 0.001$ 、であった。

図5に、6次化セルフ・エフィカシー得点の変化を示す。

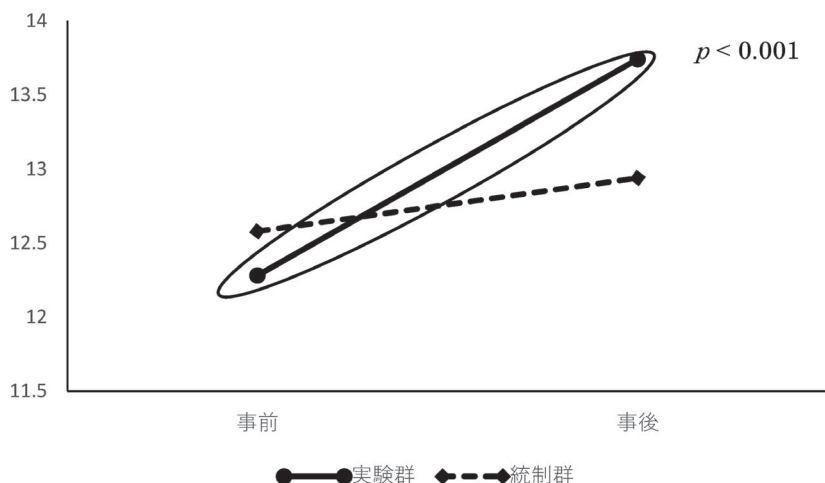


図5 実験群と統制群の6次化事業遂行セルフ・エフィカシーの変化（多重比較；Bonferroni法）

第2項 結果2

次に、A大学で実施した質問紙調査（研究2）の結果を示す。なお、参加者の平均年齢は19.84歳、標準偏差は0.78であった。

まず、「あなたの親の職業は農業従事者（兼業農家も含む）である」という質問をし、「はい」と回答した者は13名、「いいえ」と回答した者は68名であった。1変量の χ^2 検定を実施した結果、 $\chi^2 = 37.35$ 、 $df = 1$ 、 $p < 0.001$ であった。「いいえ」と回答した人数が「はい」と回答した人数に比べ有意に多いと言える。このことから参加者は、非農家子弟が、農家子弟よりも比べ有意に多かった。

「研究2」で測定した各変数の平均値、標準偏差、Cronbachの α 係数を表6に示す。6次化セルフ・エフィカシーの α 係数は0.88であった。十分な内的整合性を有すると考えられる。一般性セルフ・エフィカシーの α 係数は0.86、農業への興味・関心の α 係数は0.87、農村への興味・関心の α 係数は0.78、農業への理解・共感の α 係数は0.79であった。これらについても十分な内的整合性を有すると考えられる。

表6 各変数の平均値・標準偏差・ α 係数 ($n = 77 \sim 80$)

	平均値	標準偏差	α 係数	range
6次化事業遂行セルフ・エフィカシー	14.13	4.30	0.88	6～24
一般性セルフ・エフィカシー	6.19	4.38	0.86	0～16
農業への興味・関心	47.67	10.49	0.87	12～72
農村への興味・関心	22.92	5.41	0.78	6～36
農業への理解・共感	30.54	4.55	0.79	6～36

6次化セルフ・エフィカシー尺度の妥当性を検討するために、GSES尺度と農業に対するイメージ尺度の下位因子との相関係数を算出した（表7）。

表7 相関係数 ($n = 77 \sim 80$)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
(1) 6次化事業遂行セルフ・エフィカシー	1.00	0.22*	0.55***	0.47***	0.23*
(2) 一般性セルフ・エフィカシー		1.00	0.30**	0.48***	0.11
(3) 農業への興味・関心			1.00	0.60***	0.42***
(4) 農村への興味・関心				1.00	0.51***
(5) 農業への理解・共感					1.00

注) *** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$

6次化セルフ・エフィカシーと一般性セルフ・エフィカシーとの相関係数は、 $r = 0.22$ ($p < 0.05$; $n = 80$)、であった。

6次化セルフ・エフィカシーと農業への興味・関心との相関係数については、 $r = 0.55$ ($p < 0.001$; $n = 79$)、であった。

参考程度に、6次化セルフ・エフィカシーと農村への興味・関心との相関係数は、 $r = 0.47$ ($p < 0.001$; $n = 77$)、農業への理解・共感との相関係数は、 $r = 0.23$ ($p < 0.05$; $n = 79$)、であった。また、「あなたは『農業』に対し、汚い・きつい・危険などネガティブなものをイメージする」について、「はい」と回答した者は30名、「いいえ」と回答した者は50名であった。1変量の χ^2 検定を実施した結果、 $\chi^2 = 5.00$ 、 $df = 1$ 、 $p < 0.05$ であった。「いいえ」と回答した人数が「はい」と回答した人数に比べ有意に多かった。



第4節 考察

まず、仮説「若者の6次化事業遂行セルフ・エフィカシーが高まると、彼・彼女らの就農モチベーションが高まるだろう」を検証するために、6次化セルフ・エフィカシーと就農モチベーションとの相関係数を算出した（ $r = 0.56$ 、 $n = 168$ ；研究1）。ビデオ学習を用いた実験研究については、分散分析の結果、若者の就農モチベーションが高まったことが示された（表4、図4）。若者の6次化セルフ・エフィカシーについても高まっていたことが示された（表5、図5）。以上より、仮説は支持された。このことから、若者の6次化セルフ・エフィカシーを高めることも、若者の就農モチベーションを高める方法として有効であると考えられる。換言すると、セルフ・エフィカシー理論の観点から、6次化が若者の就農モチベーションを高める鍵になることが示された。そのため、6次化はわが国の農業就業人口の減少と高齢化問題を解決するための鍵にもなると考えられる。そのことを示すには、「若者の6次化セルフ・エフィカシーを高めることによって、就農モチベーションが高まり、結果、彼・彼女らは就農する」について検証する必要がある。今後の課題とする。

そして、6次化セルフ・エフィカシー尺度（表2）の妥当性の検討だが、 α 係数に着目すると、同尺度は十分な内的整合性を有していた（ $\alpha = 0.90$ （研究1）、 0.88 （研究2））。

セルフ・エフィカシーの観点から検討すると、6次化セルフ・エフィカシーと一般性セルフ・エフィカシーとの間に有意な正の相関がみられた（研究2）。また、4つの情報源の1つ、観察学習を通じて6次化セルフ・エフィカシーを操作することもできた（研究1）。

モチベーションに焦点を当てると、6次化セルフ・エフィカシーと就農モチベーションとの間に有意な正の相関がみられた（研究1）。

農業興味の視点から考察すると、6次化セルフ・エフィカシーと農業への興味・関心との間に有意な正の相関がみられた（研究2）。

以上より、 α 係数、セルフ・エフィカシー、モチベーション、農業興味の観点からみると、表2は6次化事業遂行に対するセルフ・エフィカシーを測定できていると考えられる。しかしながら、本研究では4つの情報源の1つである観察学習の観点から6次化セルフ・エフィカシーの検討は行ったが、遂行行動の達成、言語的説得、情動的喚起の観点からは検討していない。今後の課題としたい。

先述した社会認知的進路理論に基づくと、職業に関するセルフ・エフィカシーが高まると、その職業に対する興味が高まり、結果、その職業を選択する（安達、2003；Lentら、1994）。そのことを踏まえると、若者の6次化セルフ・エフィカシーが高まると、農業興味が高まり、結果、彼・彼女らは就農すると考えられる。農業興味からアプローチした若者の就農については、今後の課題とする。

研究1では、参加者全員が非農家子弟の若者で、研究2では、参加者の多くが非農家子弟の若者であった。したがって、農家子弟の若者についても、本研究の結果が当てはまるのかについても検討する必要があるだろう。また、本研究では結果期待の観点からの検討はしていない。これらについても今後の課題としたい。

注

- 1) 本研究の一部は、経営行動科学学会第22回大会、楠奥繁則「農業の6次産業化におけるプロデューサー育成についての研究—セルフ・エフィカシー理論からみた若者の就農モチベーション研究—」で報告された（2019年11月17日）。
- 2) ここでは若者を厚生労働省における若年雇用者の定義に基づき、15～34歳の者と定義している。厚生労働省ホームページ <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/oshirase/180821-01.html>>（2020年12月13日）
- 3) Clarkは世界各国の国民所得水準を比較し、国民所得の増大とその条件を明確にしようとした。このなかで、Clarkは産業を第1次、2次、3次に分け、次の①～③について明らかにし、それが経済的進歩であることを論証した（今村、2015）。これがベティ・クラーク法則である。①所得は第1次から2次産業へ、さらに、2次から3次産業へと増大していく。②就業人口も、第1次から2次産業へ、さらに、2次から3次産業へと増大していく。③結果、第1次と2次、第3次産業との間に所得格差が拡大していく。
- 4) 今村（2015）は「私が今から23年前に全国に向けて提唱した農業の6次産業化の理論」（p.1）と述べていることから、6次化概念は1992年に提唱されたとした。

- 5) 例えば、徳島県上勝町では、1981年2月の異常寒波の襲来で、主要産業にミカンが全滅し、多くの農の収入が断たれた。そこで、1986年にJA職員であった横石知二氏は、その農家の所得のために、料理人が山へつまものを採りに行く作業をサポートする事業を考えた(横石, 2007)。彩事業である。具体的にその事業を説明すると、上勝町の農家が葉っぱを生産し、それをつまものに加工して、JAに出荷する。そして、横石氏らが中心となって開拓した市場に流通し、販売する。このように、6次化には非農家の者が、農家の所得向上のために活動する事例もある(楠奥・加野・藤原・吉川, 2018)。
- 6) 農林水産省ホームページ <<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sanki/6jika.html>> (2020年12月13日)
- 7) コールドプレスジュースとは水も砂糖も一切加えず、熱の発生を抑えながら野菜を一滴一滴ゆっくりと時間をかけて圧縮し、液体のみを抽出したジュースのことである。
- 8) 株式会社いろどりのホームページ
<http://www.irodori.co.jp/images/news/9346_3.pdf> (2020年12月13日)

謝辞

立命館大学食マネジメント学部の松原豊彦教授にはこれまで農業の6次化研究の進め方や枠組みについて有益な助言をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

参考文献

- 安達智子 (2003) 「大学生の職業興味形成プロセス—手段性・表出性、自己効力感、結果期待の役割について—」『教育心理学研究』、第51巻第3号、308-318.
- Adams, J. S. (1965) Inequity in social exchange. Berkowitz, L. (ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, New York: Academic Press, Vol. 2, 267-299.
- Alderfer, C. P. (1969) An empirical test of a new theory of human needs. *Organizational Behavior and Human Performance*, 4 (2), 142-175.
- Allen, J. K. (1996) Coronary risk factor modification in women after coronary artery bypass surgery. *Nursing Research*, 45, 260-265.
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A. (1978) Reflection on self-efficacy. *Advance in Behavior Research and Therapy*, 1, 237-269.
- Bandura, A. (1995) Exercise of personal and collective efficacy in changing societies. In A. Bandura (ed.) *Self-efficacy in changing societies*. Cambridge University Press, 1-45. (本明寛・野口京子監訳『激動社会の中の自己効力』金子書房、1997年.)
- Clark, G. C. (1940) *The conditions of economic progress*. (大川一司・小原敬士・高橋長太郎・山田雄三訳編『経済進歩の諸条件』(上・下) 頸草書房、1955年.)
- 藤崎浩幸 (2005) 「認定農業者親子間の就農誘導と就業意欲—岩手県盛岡市での意識調査—」『弘大農生報』、第8号、52-57.
- 藤田康樹 (1997) 「農家子弟就農支援のあり方を考える」『農業と経済』、第63巻第11号、120-125.
- Gulanick, M. (1991) Is phase 2 cardiac rehabilitation necessary for early recovery of patients with cardiac disease? A randomized, controlled study. *Heart and Lung: Journal of Critical Care*, 20, 9-15.
- Herzberg, F., Mausner, B., & Snyderman, B. B. (1959) *The motivation to work*. New York: Wiley.
- 今村奈良臣 (2015) 『私の地方創生論』農文協.
- 伊藤健市 (2017) 『「やりがいのある仕事」と「働きがいのある職場」—ブラック企業を反面教師に—』昇洋書房.
- 居崎時江・谷伊織・小島雅生・ほしの竜一 (2014) 「農業体験学習が大学生の自己意識に与える影響—効果測定のための尺度作成の試み—」『東海学園大学研究紀要』(人文科学研究編)、第19号、3-16.
- 金井一頼 (2016) 「地域企業の戦略—地域社会の中で—」、大滝精一・金井一頼・山田英夫・岩田智著『経営戦略—論理性・創造性・社会性の追求—第3版』有斐閣アルマ、261-291.
- 金井壽宏 (1999) 『経営組織』日本経済新聞社.
- 清原昭子 (2016) 「農業経営の多角化と連携とは何か」『農業と経済』、第82巻第4号、5-14.
- 小久保みどり (1998) 「大学生の職業選択・キャリア開発へのモチベーションとキャリア志向」『立命館経営学』、第37巻第3号、1-20.
- 小杉大輔 (2015) 「農の6次産業化における農業者と消費者の心理」、熊倉功夫監修・米屋武文編集『農の6次産業化と地域振興』春風社、98-125.
- 楠奥繁則・加野佑弥・藤原なつみ・吉川直樹 (2018) 「ストーリーとしての競争戦略からみた農業の6次産業化研究—徳島県上勝町の『彩事業』を事例として—」『国際言語文化学会 日本学研究』、第3号 (1)、63-74.
- Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994) Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and



- performance. *Journal of Vocational Behavior*, 45, 79-122.
- Locke, E. A. & Latham, G. P. (1990) *A theory of goal setting and task performance*. Prentice-Hall.
- Maslow, A. H. (1954) *Motivation and personality*. New York: Harper & Brothers. (小口忠彦監訳『人間性の心理学（第5版）』産業能率大学出版部、1971年.)
- 松原豊彦（2016）「『6次産業化』は地域再生の切り札になるか」『山陰研究』、第8号別冊、17-23.
- 松原豊彦・楠奥繁則（2016a）「単人芋の増産に関する調査研究報告書—6次産業化の視点から—」2015年三重県志摩市委託事業.
- 松原豊彦・楠奥繁則（2016b）「6次産業化はなぜうまくいかないのか？」『RADIANT』（Ritusumeikan University Research Report/March 2017/Issue 5/食）
- <<http://www.ritsumei.ac.jp/research/radiant/gastronomy/story9.html>>（2020年12月13日）
- 室屋有宏（2014）『地域からの六次産業化—つながりが創る食と農の地域保障—』創森社.
- 農林水産省（2016）「2015年農林業センサス結果の概要（確定値）」
- <<https://www.city.murakami.lg.jp/uploaded/attachment/23405.pdf>>（2020年12月13日）
- 坂野雄二・東條光彦（1986）「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」『行動療法研究』、第12巻第1号、73-82.
- Schunk, D. H. (1987) Peer models and children's behavioral change. *Review of Educational Research*, 57, 149-174.
- 神藤貴昭（2017）「動機づけ」、神藤貴昭・久木山健一『ようこそ教育心理学の世界へ 改訂版』北樹出版、43-56.
- 田尾雅夫（1993）『モチベーション入門』日本経済新聞社.
- Vroom, V. H. (1964) *Work and motivation*. John Wiley & Sons, Inc. (坂下昭宣・楠原清則・小松陽一・城戸康彰訳『仕事とモチベーション』千倉書房、1982年.)
- 横石知二（2007）『そうだ、葉っぱを売ろう！—過疎の町、どん底からの再生—』ソフトバンククリエイティブ株式会社.

Motivating Japanese Youth to Become Farmers Based on Value-Adding Agricultural Activities and Self-Efficacy: A Human Resource Development Study of Farmers Performing Value-Adding Agricultural Activities

Shigenori KUSUOKU

Associate Professor, Faculty of Management and Law, Aomori Chuo Gakuin University

Abstract

In recent years, the decreasing and aging farm population in Japan has come to pose serious problems. Some reports suggest that having youth (agricultural workers' children and non-agricultural workers' children) become farmers may offer solutions to these problems, and then "value-adding agricultural activities" is focused as the keyword. Therefore, this study discusses this based on self-efficacy which is one component of expectancy-value theory. The following hypothesis was examined: young people will increase their motivation to become farmers by improving their self-efficacy in performing value-adding agricultural activities. To verify this hypothesis, an experiment was conducted on a class at N university using an educational video of farmers performing agricultural activities (i.e., vicarious experiences). The findings of this study supported the hypothesis.

Keywords: motivation to become farmers, youth, value-adding agricultural activities, self-efficacy, vicarious experiences

（くすおく しげのり 青森中央学院大学経営法学部・准教授）

